

■入学おめでとう！



新入生のみなさん、入学おめでとうございます。みなさんは期待や不安など、さまざまな思いを持って本校に入学されたことと思います。高校は中学校と比べて、学習面はもちろん、部活動や学校行事においても自主性が大きく求められます。何事も自分から積極的にチャレンジしていけば多くのことが得られます。まずは、積極性を大事にしましょう。

高校生活の面白さの一つは、知り合える人の幅広さです。中学校までに知り合える人と言え、せいぜい自分の住んでいる地域の人だけだったのではないかと思います。しかし、高校(特に本校の場合)になると、地元だけでなく、遠く離れたところから通学(入学)してくる生徒が大勢います。そういった人たちとの出会いもぜひ大切にしていきましょう。

高校は義務教育ではなく、自分でしっかりとがんばって、進級や卒業のための基準をクリアしなくてはなりません。欠席が多くなると進級に影響しますし、定期考査の点数や宿題などの提出状況も成績に大きく影響します。十分に気をつけましょう。

コロナ禍が続き、中学校生活ではいろいろと不自由を強いられることがあったのではないかと思います。これからは少しずつ元の形に戻って行けそうですので、感染に気をつけつつ、自分自身の夢や目標に向かって、着実に力をつけていってほしいものです。それぞれが充実した高校生活となることを期待しています。

■2・3年生のみなさんへ

2・3年生のみなさん、進級おめでとうございます。気持ちを新たに学校生活を送っていきましょう。2年生は「中だるみ」の時期などによく言われます。本校での生活にも慣れてきたことと思いますので、学習に部活動に・・・と充実した生活を送れるよう、がんばっていきましょう。「2年生でのがんばりが進路を決定させていく」と言っても過言ではありません。



3年生諸君は、いよいよ進路活動が本格化していきます。現時点で、ある程度、自分の方向性が決まっている人はそれに向けて着実に努力を重ねていってください。進学か就職か、大学か専門学校か・・・などで悩んでいる諸君もいると思います。自分の人生ですので、とことん悩み、じっくり考えて選択していくようにしてほしいものです。安易に決めてしまうのはとても危険ですし、ここでの選択は、人生を左右する一つの大きな岐路(きろ)と言えます。先生や家族、友だちなどもしっかり相談して、後悔しなくて済む判断をしていくようにしてください。希望進路実現に向けてがんばっていきましょう。

■卒業生の合格体験記

3月に本校を巣立った昨年度卒業生の合格体験記です。今回は、新潟大学に入学した渡辺七海さん、自衛隊に入隊した加藤真那登さんの2名です。ぜひ参考にしてください。

【合格体験記】 渡辺七海さん（昨年度3年4組）
新潟大学法学部入学（学校推薦型選抜（公募制））

私は新潟大学法学部に合格することができました。ここでは、推薦入試に関するを中心にお伝えできればと思います。

まず、私が受けた試験の内容は、小論文（事前に提出）と面接でした。面接では、志望動機や高校生活に関する質問の他に、小論文に関する専門的な内容の質問も受けました。また、新潟大学法学部の募集要項には求める学生像の一つに「国際感覚を身につけた人材」と記載されていたため、私はその学生像にできるだけ当てはまるようにアピールしました。私は2年生の1年間、留学を予定していたこともあり、私からその話をすると、面接官の方々も興味を持ってくださいました。面接では、難しい質問をされ、うまく答えられない場面がたくさんありましたが、留学などの話で挽回できたので、これまで色々なイベントに参加してきて良かったなと思いました。



また、面接中はわからない質問にも諦（あきら）めずに答えることを心がけていました。私は面接の練習をした際、担任の先生に「面接は難しい質問に答えられるかを見ているのではなく、その質問に対して最後まで諦めないかを見ている」と教えていただき、面接本番では、難しい質問をされても自分がわかる範囲で、多少、論点からずれていても何かしら答えるようにしていました。

私が受験を通して大切だと感じたことは、色々な人に会うことです。私は、1年生から様々なイベントに参加してきました。特に、1年生の頃に参加したイベントで、アメリカから東大に留学してきた方のお話を聞いたとき、世界の同世代の子の頑張っている姿を見てとても刺激を受けました。このような様々な人との出会いの場を設けたことで、モチベーションに繋（つな）がり、頑張ることができたのだと思います。これからも、たくさんの人と交流し、自分の目標に向かって頑張りたいと思います。

最後になりますが、これまでサポートして下さった先生方、また、応援して下さった方々、本当にありがとうございました。

【合格体験記】 加藤真那登さん（昨年度3年5組）
陸上自衛隊一般曹候補生

私は陸上自衛隊の自衛官候補生と一般曹候補生の2種類の試験を受験し、どちらも合格することができ、ホッとしました。私は定年まで続ける意思があったことから、一般曹候補生を選び、宮城県の大賀城駐屯地に行くことを決めました。

私が陸上自衛隊を目指そうと思ったきっかけは、2011年3月11日に起きた東日本大震災の後です。当時私は6歳で、地震が起きた時は恐怖と不安でいっぱいでした。なかなか家に帰ることができず、近くの避難所で生活をしていました。

避難所で生活していた時、私の不安な気持ちを吹き飛ばしてくれたのが陸上自衛隊の方たちでした。優しく接してくれたり、炊き出しや支援物資などを届けたりしてくれて、自分にとってヒーローのような存在でした。そんな陸上自衛隊の人たちの姿を見て、今度は自分が陸上自衛官になり、災害などで困っている人を助け、恩返しをしたいと思っています。

陸上自衛隊に入隊したら、厳しい訓練を耐え抜き、一人でも多くの命を救えるように日々精進していきたいです。



■ 保護者対象進路活動説明会について

3月14日（火）に新高校3年生の保護者様に対して実施した「保護者対象進路活動説明会」の動画を3月16日（木）に配信し、期限の3月31日（金）までにご視聴いただいたかと存じます。

進学希望者に関しては、推薦入試（指定校制・公募制）の基準等についてご説明しました。多額の学費がかかることから、評定平均値が基準に達しているからと安易な学校選択を行わないようご家庭でもご指導いただきたいと思います。また、さまざまな奨学金制度もご案内いたしました。ご家庭の収入の状況にもよりますが、奨学金制度もうまくご活用いただければと存じます。なお、日本学生支援機構の奨学金（予約採用）については、今後、BLENDにて校内説明会（※生徒対象）の日時等をお知らせします。日程については、ある程度ゆとりを持たせて締切日等を組んでいく考えでおりますので、焦らず、確実に書類等を準備くださるようお願いいたします。

就職希望者に関しては、例年7月1日にならないと求人票が出ませんので、それ以降、希望の仕事を探し、職場見学をしたうえで志望企業を決定してほしいと思います。いずれにしても、ご家庭でよく話し合ったうえでどのような進路にするか決定させていくようにしてください。



■ダルビッシュ投手の思い

みなさんもそうだったかもしれませんが、先月開催された第5回ワールドベースボールクラシック（WBC）を筆者も全試合、テレビ中継を見ました。これまでも日本チームにはイチローさんや松坂大輔さんなど、素晴らしい選手が参加し、感動的なシーンも多くあったと記憶していますが、今回の日本チームには特に一体感を感じましたし、準決勝、決勝に関してははしびれました。栗山英樹監督が言うように、「野球って、すごいな!」と感じました。



優勝した日本チームにおいて、MVPを獲得した大谷翔平選手は投打に本場に素晴らしい活躍で、WBCという国際舞台においても、「リアル二刀流」を見事に体現していました。次回大会も出場したいと大会後、話していましたが、それまでにどのように進化して、さらに日本チームにどんな貢献してくれるのか、ワクワクさせられます。

ところで、日本チームの精神的支柱となっていて、若手の良き手本であり、兄貴分として慕われているなど感じたのがダルビッシュ有投手でした。今回のWBCの前に、ダルビッシュ投手が2009年の第2回WBCで優勝投手となったときのシーンがよくテレビで流れていましたが、明らかに14年前の何かやんちゃさも漂う雰囲気とは違って、一回りも二回りも人間的な器が大きくなっている印象を受けました。

宮崎でのキャンプから1か月以上、苦楽をもとにしてきた日本チームにおいて、準決勝のメキシコ戦を前にしたチームメートへの「声出し」も印象に残りました。「宮崎から始まって約1か月、ファンの方々、監督、コーチ、スタッフ、この選手たちで作り上げてきた侍ジャパン。控えめに言っても、チームワークも実力も今大会ナンバーワンだと思います。このチームでできるのはあと少しで、今日が最後になるのはもったいないのでみんなで全力プレーをしてメキシコ代表を倒して明日につなげましょう」。

決勝のアメリカ戦では志願して出場したと聞きました。8回に登板してホームランを1本打たれたものの、何とかリードを守り、9回の大谷投手につなげました。筆者はダルビッシュ投手のマウンドでの責任感の強さを感じました。

イタリアとの準々決勝は、アメリカに飛び立つ前の東京ドームでの最後の試合となりましたが、その試合後のダルビッシュ投手のコメントにも心を打たれました。「日本での投球はこれが最後になるかもしれないということなので、ここで生まれ育って、おかげで今がある。そういうふうに感じています」。日本球界に復帰する意思がないことを示唆するコメントとも取れるものですが、日本に対する思いが伝わってくる言葉でした。その根底にあるのは、日本の球団関係者やファンなど、あらゆる人たちに対する「感謝」の気持ちでしょう。どんな素晴らしい能力を兼ね備えた人たちであろうとも、自分一人では生きていくことはできません。そういった気持ちになれるかどうかは、それぞれがどのように人格を培っていくかにかかっていると思います。

さて、最初にも記したように、WBC開催期間、筆者も連日テレビの前に釘づけでした。日本のチームワークの良さ、中でもダルビッシュ投手のチームメートを包容する雰囲気に魅了された日々でした。今は侍ジャパンロスです。

文責：清水聖（進路指導主事）